

## 長編小説は下巻から

首藤 静夫

水上勉の名作とされる『飢餓海峡』。単行本の上巻だけ読んだのが何年前か。切りの良い所で上巻が終わっていたのでそれに満足し、下巻に手がでなかった。何しろ上下合わせて七百ページある大作である。この小説は単なるサスペンスでなく、純文学としても十分面白い。内容に厚みのある、読み応えのある作品だった。

過日、図書館の棚に上下巻並んでいるので思わず下巻を手にとった。しかし上巻の中身は印象深いところしか覚えていない。これで推理小説を最後まで読み通せるだろうか。といって、もう一度最初から読み直すのはきつい。ままよと下巻を借りて読み始めた。

上巻は北海道と下北半島を舞台に、ここで生じた大火と津軽海峡での船の大遭難を織り交ぜた壮絶な殺人の物語だ。下巻はそれから十年、迷宮入りしていたこの事件が今度は日本海に面した舞鶴の殺人事件に絡まってくる。読み進めていくと、前半部の大事なシーンが上手に折り込まれていた。それが二度、三度と出てくるので最初から読み直した気分になった。

思うに長編は中ほどから読み始めたらどうだろうか。序の部分は大体面白くない、これを我慢して読み続けるのが苦痛になった。仮に最初から読んでも内容を忘れるものだ。どの作者もその辺りを考慮して時々前半を振り返ってくれている気がする。それなら後半部だけでもかなり内容が消化できはしまいか。

それは兎も角、この『飢餓海峡』では後半が始まってすぐ、殺人犯が明示される。従って読者は犯人捜しという最大の愉しみを奪われ、あとは犯人が築いた鉄壁のアリバイ崩しを読むことになる。テレビの『刑事コロンボ』と同じである。それはそれであま面白かったが終盤は謎解きの辻褄合わせの部分が多い。たいていのサスペンスに共通することだが興ざめだ。折角の大作が最後で色あせた。

松本清張の『点と線』は玄海灘の海岸、これは津軽海峡と舞鶴海岸である。いずれも寒々しい海辺の物語である。